

(昭和二十年四月、生活社刊、三三七頁、定價八圓二十錢) (藤原利一郎)

蒙疆陽高縣漢墓調查略報

本書は昭和十七年の春秋に互つて、大同石佛保存協會と陽高縣史蹟保存會の協同主催で行はれた同地古城堡に於ける三基の古墳調査の結果を概述し、添へるに出土品の目録を以てしたものである。この漢代古墓の發掘は墓室が地下深くに位置した爲に多大の努力を要したのであつたが、三基を通じてその木組の墓室なり、夫婦を埋めた棺がそれ／＼稀に靚る完好な保存状態を示し、且つ多種多様な副葬品を存したこと寧ろ朝鮮平壤附近に於ける漢墓の例を凌駕するものがあつて、これが棺内に於ける遺骸處理の示す新事實と共に大いに學界の注意を惹いたのである。それ等が短時間の間に處理を経て調査主任たる水野清一氏の手で、發掘の經過をはじめ構造なり副葬品の一斑が、右の實狀を傳へる寫眞と共に公刊を見るに至つたことは學界の知見を高める適切な處理として大いに歡迎される可きである。一體學術發掘の結果の報告は當然公刊せらる可く、またそれは詳細に互るべき筈である。併しこの爲に遂に出版に至らない遺跡が可なり多い事になつて、かへつて學問の發達の妨げる結果を來してゐる實狀にある。陽高の様な新しい知見に就いて、先づ概報の印行を見たことは、記述が要領を得たものたるを相俟つてまさに右の缺陷を補ふものである。たゞ本書にあつて三枚の挿圖を添へてあるが、それ等は孰れも塚の外形

と墓室の位置を示してゐるのみで、より必要な墓室の構造なり副葬品の配列の圖を缺くが爲に、文章で可なり長い説明が加へられてゐるにも不拘、隔靴搔痒の感のあるのは遺憾と云ふ可く、なほ遺跡の性質觀として、これを朝鮮平壤附近の漢墓と比較して其差異として擧げられてゐる一半が、執筆者の後者の知見の不充分に依て誤つてゐること、例へば棺前に墓鎖を置くことが早く石殿單の第九號墳に於いて認められ、また屍を厚く絹布其他でまくことも同地第二一二號墳其他で認められる事實を擧げて、兩者の一致のより著しい事實を附記して置く。

(A5版、本文七五頁、挿圖三枚、圖版十二頁、大和書院刊、定價壹圓九十錢)

古代の南露西亞

ロストウツエフ著
坪井良平・樫本龜次郎兩氏譯

この書はロストウツエフ教授の "Iranians and Greeks in South Russia" (Oxford, 1922) —— 譯した事か右の書名は本書のどこにも見えない——の全譯に譯者の注記其他を添へたものである。原書は改めて云ふまでもなく、南露西亞古代に關する既往の諸見解を綜合して考古學に偏することなく、その實狀をば容易に近づき得ない露西亞本國以外の學界に傳へようとした書物である。既に出版後二十年以上も経過してはゐるが、それがもと我が國に於ける所謂歐亞大陸北部の古文物を論ずる人士の殆んど唯一の據所をなしてゐる點よりし、なほ同教授が引續いて公にしたその分野から支那の古美術を論じたものに較べて、記述が概ね妥

彙報

國史研究室近況

當な所から、爾後依然として適當な文獻に乏しい今日、この譯書の公刊は時期を失した嫌はあるが、我が學界に於いて歡迎せらるる可きであらう。それに加へるに本書の譯文は近年續出する一部考古學書の譯本に較べると非常に念が入れてあるばかりでなく、出版後可なりの年月を経たと云ふ考慮からでもあらうが、譯註なり、參考書目の追加を以てすると云ふ良心的なものたる點を多とす可きである。印刷も時節柄よく出来てゐて、圖版の如きも網版の複寫ながら大體分明するのは欣ばしい。たゞ折角加へられた譯註であるが、執筆者の關係から不得止とするも、朝鮮に關する知見が大部分を占めて、それ等が細かな點に互つてゐるにもかゝらず、一層大切な露西亞本國なり支那本土の所見に於いて缺けた所の目立てゐるのは、よしやこれを同文物の東方波及と云ふ日本の學界への關係に結びつけて考へるとしても、極めて不充分なもので、この程度のものならば附加せない方が寧ろ原著者に對して敬意を表する途ではなかつたかと思はれるのである。

(A5版、本文四二〇頁、圖版三二頁、地圖一枚、桑名文星堂刊、賣價十三圓四十三錢) (以上梅原末治)

讀史會歡迎會 新入學生並びに生徒の歡迎會は五月二十一日午後、市内武者小路千家の弘道庵に催された。西田教授はじめ諸教官、研究室職員、學生生徒の會する者約卅名、宇治に勤勞出動中の學生らも折柄の休日を利して參集、稀に見る盛會であつた。會は諸教官の談話を以てははじめられ、西田教授は特に南方に關する資料を展示して、この方面に於ける先人の活動を語られたのは極めて感銘深いものがあつた。又新一回生らは近く勤勞出動すべく豫定されてゐるので、この壯行の意も盛られ、學徒と勤勞との問題も連りに論ぜられて時局下逞しい青年の意氣を開陳して力強い限りであつた。

講演 宇治出講、洛南宇治方面に勤勞動員中の本學文・經兩學部學生の爲めに隨時文化講演が行はれ、國史研究室よりは五月八日夜西田教授の南方諸地域に於ける中世以來邦人活動の歴史的な展開に關し、又五月十七日夜には東伏見講師は宇治・醍醐附近を中心とする造形美術に就いて講演を行つた。學園を離れて敢闘する學生は兩夜共晝の疲れを忘れて、偉大な我が歴史的な文化活動に觸れ、感銘深いものがあつた。

月曜講義、學生課主催の月曜講義は時局下の要望に對へて鎌倉